



コタンメール 52号

平成 22 年 3 月 15 日 発行



アプ ヤン コタン オッタ リムセアシ! (流水のくるまちで踊りました)

流水の町として知られる紋別市では、毎年夏と冬にシンポジウムを開催し、民族学や考古学に関する講演・研究発表などを行っています。2月22日に、第25回「氷海の民シンポジウム」が開催され、学芸課北原が「アイヌ古式舞踊の世界へ」と題して、ユネスコ世界遺産となったアイヌ古式舞踊をテーマに講演をしました。これに合わせ、資料から舞踊の復元に取り組み、昨年アイヌ文化フェスティバルに出演した Team Nikaop も芸能公演を行いました。

紋別市はトンコリ奏者西平ウメさんをはじめ、樺太からの移住者にゆかりの深いまちであることから、樺太地方の復元演目を交えて構成し、2時間にわたって舞踊や楽器演奏、物語などを上演しました。また、美幌から当館の研修に参加している木村君由美さんは、金田一京助氏の筆録ノートから書き起こした北見地方のサコロペ(英雄詩曲)を語り、道北地方の伝承も紹介しました。古いものを復元した演目は、現代の演目に慣れた目には新鮮で、たいへん意欲的な取り組みだと評価を受けました。

会場には道内各地や本州からも参加者があり、公演の最後には参加者も交えての輪踊りで交流を深めました。(きたはら じろうた)



●樺太のヘチリ 輪をほどこいて踊り手が交差する



ニトペ チウイナ ワ チケム ワ インカラアシ! (樹液をとってなめてみた!)

3月9日と11日、私達、担い手育成研修生4人はアイヌの伝統的生活空間(イオル)再生事業における、自然素材育成事業素材供給ゾーン(竹浦地区 A-2 Fブロック)にてイタヤカエデと白樺の樹から樹液を採取しに行きました。

イタヤカエデはアイヌ語でトペニ [トペ(乳汁)ニ(木)]といい、とっても甘い樹液が採取できる樹で、アイヌの人達はそのまま飲んだり、樹液でご飯を炊いて食べたり、煮詰めて飴にして食べたりしていました。

樹液採取の結果、イタヤカエデから1.8リットルの樹液の採取に成功しました。(※残念ながら白樺からは時期が早かったせいか樹液は採取できませんでした。)

その樹液で炊いたご飯と、煮詰めた樹液の試食会を行いました。試食の感想は「甘い樹液のご飯なんて初めは不安でならなかったけど、予想以上に美味しくて沢山おかわりしてしまいました。」などと好評で、試食会は大成功に終わりました。(やはた かずみち)



●イタヤカエデから樹液を採取



「観光」アリアンペ モト エパシクマ！（観光の起源を解説！）

3月6日（土）、アイヌ民族博物館で、北海道開拓記念館とアイヌ民族博物館共催の公開講座「北海道観光・イメージの形成史を考える」が開かれました。北海道開拓記念館の三浦泰之学芸員と田村将人学芸員、アイヌ民族博物館の野本正博学芸員が、明治以降、観光資源としての北海道がどのように国内外に発信され、その中で北海道のイメージがどのように作り上げられてきたかをテーマに発表されました。



●三浦学芸員

三浦学芸員による「絵葉書文化を考える」では、写真やテレビが発達していなかった明治期において、映像を発信する有効な手段としての絵葉書がイメージ作りに大きな役割を果たしたことが述べられました。

昭和12（1937）年発行の日高線全通記念絵葉書の封筒には、日高山脈と牧場の馬とアイヌの男女が描かれていますが、これが、和人が見た日高地方のイメージを象徴しています。カメラが一般的ではなかった時代、旅行者が自分の見た風景や産物を家族や友人に伝える手段として、出来合いの絵葉書を活用して自分の印象を伝えます。受け取った人々は、

描かれた異国の風物を真実と受け止めるので、和人目線のアイヌがそのまま現実のアイヌとして信じ、「アイヌ」の先入観が定着されていったと解説。その後に発行された絵葉書は、開拓の進展を示しながら、一方において冒頭に紹介した絵葉書のように、アイヌを北海道観光のイメージに重ねて来た結びました。

同館の田村学芸員からは「戦後のサハリン先住民と観光」について講演されました。

第二次世界大戦後、サハリンから網走へ引き揚げて来たニヴフやウイльта、サハリンアイヌなどの少数民族を主題とした「オロチョンの火祭り」、民芸品「ニポポ」といった網走の観光資源が、それぞれの民族の伝統的文化の継ぎはぎで北方先住民族として表現されたことを紹介し、人々の誤ったイメージが助長されたことが話されました。

戦前戦後を通じて、北海道の観光資源はアイヌ民族を含めた北方諸民族でしたが、そこでは和人が作り上げたイメージが観光として取り上げられ、ゆがめられた先住民族像が発信されたことが伺えました。

当館の野本学芸員による「新たな局面を迎えたアイヌ観光」では、白老の古写真を映しながら、明治10年、明治天皇台覧の「擬似クマ送り」に端を発した、白老のいわゆるアイヌ観光の歴史に



●野本学芸員

ついて講演しました。その過程で受けた屈辱と、観光から伝承、そしてアイヌ民族の真像紹介へと変化させてきた財団法人アイヌ民族博物館の現在を説明。その上で、白老のアイヌ観光の象徴ともいべき商業施設「ミンタラ」の解体を新たな局面として、これからのアイヌ観光は、北欧や北米等に見られる、先住民族の真像に興味と関心を抱かせる情報発信であるべきと述べ、その第一歩として、北海道の玄関である新千歳空港に、国によるアイヌ文化紹介のディスプレイを設置することを提言してシンポジウムのしめくくりとしました。



●田村学芸員

（きだ みずえ）